

## プライベート・プラクティスを構成するもの —現代における精神分析的な精神療法の実践—

企画：加藤 隆弘 (九州大学精神科)  
岩倉 拓 (あぞみ野心理オフィス)  
司会：加藤 隆弘  
浅井真奈美 (小泉心理相談室)  
発表者：永田 悠芽 (上町カウンセリングオフィス)  
小笠原貴史 (小笠原こどもとかぞくのカウンセリングルーム)  
衛藤 暢明 (福岡大学医学部精神医学教室)  
宮田 善文 (自由が丘 宮田精神分析室／横浜カメラホスピタル)  
指定討論：鈴木 智美 (可也病院／精神分析キャビネ)  
平井 正三 (御池心理療法センター)

医療現場、そして心理臨床の現場においても構造化した面接が困難な現場が多く、精神分析・精神分析的な精神療法の実践の場は限られている。このような現状で、精神分析・精神分析的な精神療法の実践においてプライベート・プラクティス(開業実践)は重要な場となっている。今回の合同企画では、プライベート・プラクティスの現代における構成要素とその意義に焦点を当てたい。

プライベート・プラクティスは、どのような訓練、経験、経済面などの条件が必要なのか、という大きな問いがある。また、職住一体の形態であったS.フロイトのスタイルに対して、現在の開業のありようは多様である。その形態は、自ら部屋を借りて独立する、複数で部屋を分ける、個人が既に開業している部屋を借りる、などがある。クライアントの選定や確保においても、どのようなルートにするのか? 宣伝や広告はどうするのか? そして、実践の理念として、精神分析・精神分析的な精神療法の専門なのか、さまざまな主訴のクライアントを受け入れるのか、などの経営の理念も重要な構成要素だろう。

組織や集団に属さないプライベート・プラクティスはよりパーソナルな営みとなる。これは、純粋な精神分析的な事態が展開しやすい特徴をもつ反面、密室性の高まりは治療者の自己愛の問題が反映されたり、クライアントとの無意識的な共謀も生じやすい事態と言える。

また、医師と心理士という職種の違いも影響することが考えられる。今回は、異なる状況でプライベート・プラクティスを営んでいるシンポジストに実践を語っていただき、指定討論を加える。

本合同企画を通して、現代の臨床状況に照らしたプライベート・プラクティスの構成要素について改めて考える機会としたい。